

社報 高縄

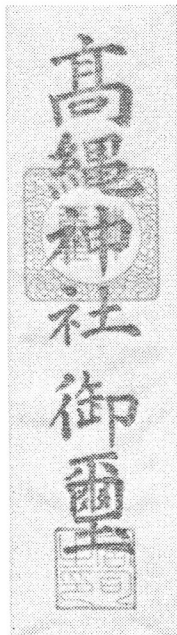
平成27年12月号

発行所
〒799-2441
愛媛県松山市宮内甲102番地
高縄神社社務所

お正月には、この年がよい年でありますようにと願いをこめて、家に神様を祭ります。祭る神様のお札は、



を最上位とします。これが神宮大麻です。二番目には、当社の氏子であれば



のお札を祭ります。さらに区(部落)諸社のお札や家に縁のある神社とか特に信仰する神社があれば、そのお札を祭ります。

なぜ「天照皇大神宮」が最上位かと申しますと、天照大神様が、最上位の神様だからです。伊勢の皇大神宮が、最上位の神社だからです。

そのお札である神宮大麻(薬物ではありません!)について、少し説明致します。

十二月を師走といいますが、これは昔、年末には

御師(おし)が全国を走りまわったことに由来するといわれています。(あくまで一説です)

御師は、伊勢の神宮と崇敬者の間に介在していた神職で、地方では「伊勢大夫」とも呼ばれました。年末になると、お正月に家々で祭る御祓大麻というお札を頒布するために、御師が全国を走りまわったのです。

明治になって、御師は廃止されました。そして、全国に頒布されるお札は神宮大麻とよばれるようになり、その頒布にたずさわっていた組織の一つが神宮奉斎会(名称には変更あり)です。

戦後、神宮奉斎会は発展的解散という形をとり、新しく出来た宗教法人神社本庁設立母胎の一つになりました。そして神宮大麻の頒布は、神社本庁が全国の神社を通じ神職をしてこれが頒布に従事せしめる、ということになり現在に至っています。

(なお、明治四十五年、神宮奉斎会の大麻頒布委嘱解除とか、昭和二年、大日本神職会前身団体府県支部の大麻頒布嘱託とかについては、ここでは述べません)

ともあれ現在、河野地区で神宮大麻の頒布に従事しているのは、高縄神社神職とその協力機関である総代・協議員さんたちです。

なお「高縄神社御璽」は、戦後、新体制のもとでの神宮大麻頒布従事にあたり、併せて頒布するためには作られました。

お正月には「天照皇大神宮」「高縄神社御璽」のお札を共に祭って、明るく清々しく新年を迎えられますように。

高縄神社の年末年始

歳末祭・大祓式

十二月三十一日(木曜日)午後四時

一年の神恩を感謝し、罪けがれを祓います。

除夜祭

十二月三十一日(木曜日)午後十二時 始式

年あらたまる厳肅なる時の神事です。

歳旦祭

一月一日(金曜日・祝日)午前十時 始式

年のはじめの祭典です。

年始祭

一月二日・三日 午前九時・正午・午後四時

新年を寿ぎ、氏子の平安と繁栄を祈ります。

左義長

一月四日(月曜日)午前七時 始式

正月明けに、注連飾りや古いお札等を焚上げます。

初詣の受付

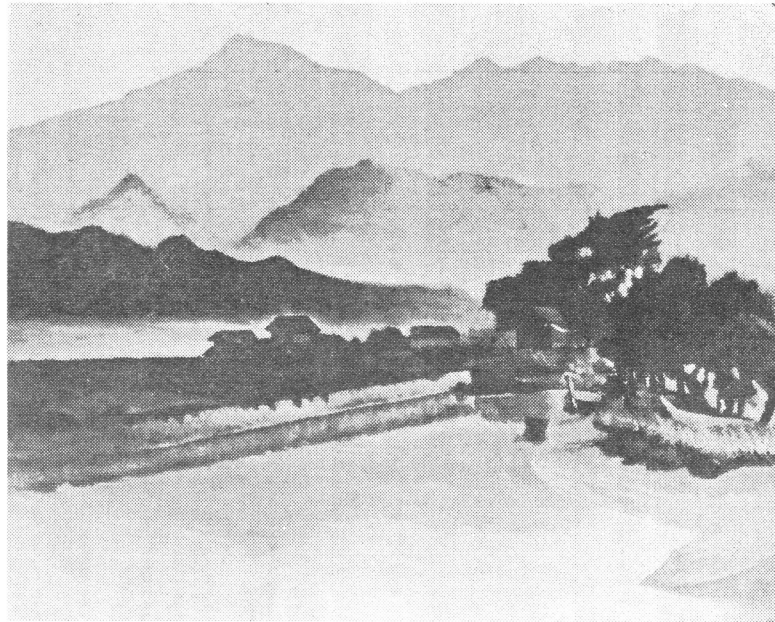
一月一日午前〇時～三日午後四時

破魔矢・お札・お守・おみくじ・絵馬など用意して、皆様のご参拝をお待ちしています。

家内安全などの、ご祈禱を奉仕します。

温故知新

河野川の河口付近から高縄山を遠望（昭和十七年の油絵）



河野の由来

小千（をちの）高縄（たかなは）は、神様のお告げで高縄山に居城しました。

その子孫の小千守興（もりおき）は、日本軍と唐・新羅の連合軍とが戦った白村江（はくすきのえ）の戦いに出陣しましたが、この戦いは負け戦で、守興は敵に捕らえられて唐（中国）の越（えつ）という地方に

つれて行かれ、越の地で数年間すごしたのですが、奇跡的に日本に生還できました。

その小千守興の子である玉興（たまおき）という人は、役行者として知られる役小角（えんのをづめ）と親しい間柄でした。

役小角は葛城（かつらぎ）の神のことで譏（おとし）いれるために悪口を言われること）による勅勘（天皇様の怒りにふれること）をこうむってしまい、伊豆へ流されることになりました。

玉興は小角の境遇をあわれみ、難波（今の大阪）で会いました。すると小角は、伊豆へゆく前に大三島へお参りをしたいといっています。

そこで船を手配して乗ろうとしたけれども、どの船も乗せてくれない。と、見なれない唐船（中国風の船）がいたので招き寄せ、たのんでみると、快く乗せてくれることになりました。

出港して伊予の大三島にむけて航海するうち、吉備（岡山県）沖（今の瀬戸大橋が架かっているあたり）でみんな喉が渴いた。けれども船には水が無い。そこで玉興は祕術でもって神を念じ弓の筈で海面をかきまわすと、あらふしぎ、海水のなかから真水が湧いてきて、みんなそれを飲んで渴きをいやしたのです。だから、そこを備中（びっちゅう）水島といっています。

船頭は日本人ではないので言葉が話せない。けれど、漢文による筆談で対話ができました。

そこでわかったことたるや、驚くべし。

その船頭は、唐（中国）の越（えつ）の生まれで、母は越人だが父は日本人だという。その父の名は、

小千守興だというから、びつくり仰天！

なんとその船頭は、玉興の異母弟でした。

これぞ神様の御ひき合わせにちがいないと両人は涙をながしてよろこびました。

役小角は、大三島にお参りしてから、伊豆へ赴きました。船頭だった異母弟は、玉澄（玉純とも書く）と名乗ることにし、異母兄の玉興とは親子のちぎりを結びました。

そして小千（をち）の姓を、「越知」と書くことにしました。玉澄（玉純）の母が越人であり、その血をひくからということでした。

後には、神様のお告げで知に日を加え「越智」と書くようになりました。

玉澄は高縄山のふもとに住みました。玉興は玉澄に教えて言いました。高縄山は神の山である。あの備中水島で海水の中から真水が湧いたのも、高縄山の水を呼んで起こした奇跡なのだ。であるから汝はこれから、水、予が里となす可しとの意で「予可里予」の四字を組み合わせて、名乗りを「河野」とせよと。

—以上『予章記』という書の記述を現代語で要約しました。『予章記』は室町時代に書かれた河野氏の歴史書です。だから正史（国家が編纂した正式の歴史書）ではありません。室町時代に奈良時代以前のことを述べているのですから一次史料（語られる事がらと同時代に書かれ作られた文物）でもなく、この部分は伝説であり、史実とは言えません。けど面白いでしょう。

『日本霊異記』という本に「越智直（をちのあたひ）」

の名がみえます。

越智直と小千守興とが、同一人物なのかどうか、わかりません。

同じ時代に、風早郡（旧北条市）から出陣して、やはり捕らえられて唐にいたが後に帰ってきた人物として、物部葉（ものべのくすり）がいます。これは正史『日本書紀』に書かれているから史実であろうといわれます。

高縄山ふもとの郷は古く「加波乃」と書かれていました。奈良時代の行政改革で全国いっせいに地名を二字で書くようになった—たとえば倭（やまと）を大和に、明日香（あすか）を飛鳥に—。それで「加波乃」が「河野」になったのが実態であり、越智玉澄と「水可予里」の話は、やはり伝説です。

けれども高縄神社では、この伝説を、とても大切に考えていました。そのことを示す古文書なども、追々に紹介したいと思います。

河野氏の家紋と高縄神社の神紋

河野氏の家紋は、傍折敷縮三文字隅切（そばおしきちぢみさんもんじすみきり）といいます。略して隅切折敷縮三文字（すみきりおしきちぢみさんもんじ）といい、更に略して縮三文字（ちぢみさんもんじ）で、河野小学校の校歌では「ちぢみみもじ」と歌われ、同校の新聞は標題が『みもじ』です。

高縄神社の神紋も、河野氏の家紋と同じく傍折敷縮三文字隅切です。

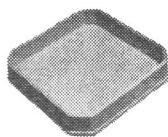
河野氏の家紋と河野氏の氏神である三島宮（大山祇神社）の神紋が同じで、高縄神社は三島宮の分社

であり明治維新まで河野三島宮ともよばれていたのですから、当然といえば当然です。

この家紋・神紋の起原は、やはり伝説で語られています。

よく知られているのが、源平合戦で河野通信が、源頼朝からもらった「天下の将たる三番目」の恩賞に由来するというものです。そのとき三の字が波にうつって縮三文字になったと語られます。

この源平合戦の話のほかに、それよりもはるかに古い時代の話として語られる伝説があります。それは……



朝鮮半島の新羅（しらぎ）という国との戦いで、河野氏の遠い先祖である小千御子（をちのみこの曾孫にあたる三並という人は、わが国で選ばれた十人の大将のうち第三番目の大将として、数百隻の軍船をひきいて海をわたりました。

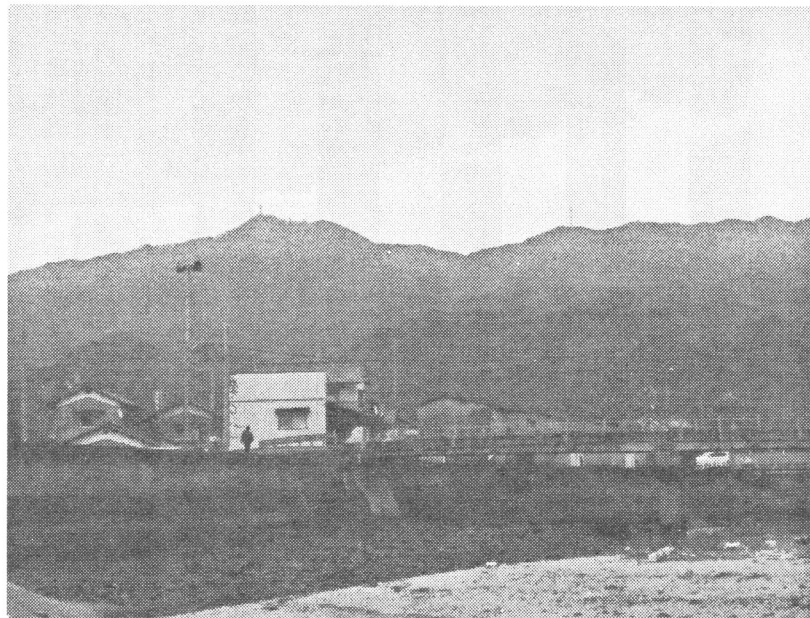
新羅の大将は降参し、日本と新羅の両国は和睦して、日本の軍勢はそろって帰国したのです。その時、三並の船の紋章は、ほかの船にも同じような紋章をつかっているのがあってまぎらわしいので、べつに傍折敷（そばおしき）を角ちがいにはさんで船べりに立てて目じるしにしたところ、その影が海面に映り波に揺られる三の文字に見えたといわれています。

その、勝ち戦で帰ってくるときの吉例にならない、傍折敷に三の文字をあしらったのを家紋と定め、

子々孫々まで伝えて来た。それが河野の家紋となっている傍折敷縮三文字隅切の始まりであるということです。

以上は、『予章記』に書かれている伝説の現代語訳です。

折敷（おしき）とは、「折り敷き」の意味。檜（ひのきの「へぎ板」でこしらえて、四方に縁（ふち）を折りまわした白木の盆。これに食物を盛った土器をのせ、古くは食事に使い、今は献饌（神様にお供えをささげる）などで用います。



現在の河野川河口付近からの高縄山遠望

祭典録

明治祭

平成二十七年十一月三日午前七時 始式

奉仕 宮司 禰宜

参列 一名

講話 (要旨)

今日は文化の日／旧制度では明治節／国家の祝日と皇室の祭日が祝祭日／敗戦により祝祭日は廃止／昭和二十一年十一月三日、旧明治節の日に日本国憲法公布。その日を「文化の日」に／明治天皇による欽定憲法を全面的に改めた新憲法。半年後の五月三日に施行／その経緯、占領軍が明治天皇の御事跡を塗り潰そうとした意図が明白／近年ようやく憲法改正の動きが顕在化／これ神々の御意向か／神道は「まつりごと」の宗教。国事に無関心ではない／祖国の有るべき姿の顕現に、更なる神威発動を祈願／氏子の、とりわけ敬神崇祖尊皇の志あつき人たちに、神の御加護、格別でありますように。

新嘗祭・神宮大麻頒布始祭

平成二十七年十一月二十三日午後三時 始式

奉仕 宮司 禰宜 助務二名

参列 総代 協議員 来賓

手伝 高縄神社敬神婦人会

講話 (要旨)

祭典、めでたく終えるにも拘らず、めでたくない話題、お許し願いたい／つい先ほど、靖国神社で爆

発騒ぎがあった由／英霊を祭る聖地を冒瀆する意図なら許しがたい／爆発といえれば先日のフランスにおけるテロ事件／祖国の危難に国歌『ラ・マルセイエーズ』が歌われた／これは革命義勇軍の将兵がマルセーユからパリへの進軍で歌ったのが始まりで、わが国歌『君が代』が平和的なのとは大違い。けっこう血なまぐさい／今のフランス建国の理念は自由・平等・博愛／では、日本の建国理念は？

わが国にとって甚だ屈辱的なものであり、そのことが安政の大獄という悲劇を生んだ／犠牲となった志士の代表格が吉田松陰／処刑される前、安政六年十月十一日づけで弟子に宛てた手紙には、
「神勅相違なければ日本は未だ亡びず、日本未だ亡びざれば正気重ねて発生の時は必ずある也。只今の時勢に頓着するは神勅を疑ふの罪軽からざるなり」と書かれています。

天壤無窮の神勅

今日の新嘗祭です。齋庭の穂の神勅に基づいてい

宝鏡奉斎の神勅

TPPの締結に伴い予想される農業への大打撃

齋庭の穂の神勅

これを乗り越えるに齋庭の穂の神勅が想起される

これは、わが国土に皇孫が天降りなさるときに、天照大御神から授けられた御言葉／天壤無窮の神勅は、皇統存続の根拠／宝鏡奉斎の神勅は同床共殿だったのが三輪山の麓に移され巡り巡って伊勢の地に鎮座なされた神宮の根拠／齋庭の穂の神勅は、天照大御神がお召し上がりになる御米と同じ御米の稲種を地上へ降られる皇孫にお授けになったとの伝えであり、大嘗祭・新嘗祭の由来を語ると共にわが国農業の根拠となすべきこと。

TPPの締結に伴い予想される農業への大打撃。これを乗り越えるに齋庭の穂の神勅が想起される。ことがないのであれば、それは先祖たちが伝えてきた信仰が衰退しているということ。信仰の衰退は、時代の流れのせいだけでなく、私どもの怠慢のせいでもあります。神宮大麻頒布にしましても宝鏡奉斎の神勅を思えば、まだまだ努力が足りません。氏子にとって、心の支えになるのが氏神様である筈です。

ところでTPP（環太平洋パートナーシップ協定）が大筋合意に達したという／関税撤廃をめざすのであるから、わが国の農業にとって大変な脅威／今から五年前、民主党政権のときに、TPPのことを「平成の開国」などと菅首相が宣言／自らの内閣を「奇兵隊内閣」とも称していた／幕末の開国は、

ところが今の高縄神社は、心の支えになるどころか、氏子からの信頼さえも失いかけていました。ひとたび失われた信頼をとりもどすのは至難のわざです。が、決してあきらめません。必ず立て直します。
本日は、ご参列ありがとうございました。